

魅力ある街づくりとは

リポーター 石田 健太郎 (根下戸)

と、何か胸の高鳴りのようなものを感ずるじやありませんか。しかし、それらが完成しただけで、大館が魅力ある街に生まれ変われるのでしょうか。行政ばかりに頼らず、街に住む私たち出来ることは何か無いのでしょうか。そう

今回は、青年会議所を訪ねて若者の視点から街づくりについてリポーターした石田リポーターと、主婦の立場から家庭ごみの出し方について第一環境センター取材した佐藤リポーターをご紹介します。

「大館の街ってなんだか魅力が無いなあ。」今まで漠然とそう思い、あきらめていたのは私だけではないはずです。でも近ごろでは、「大館の街はどんなふうに変わっていくのだろう」と、あきらめの思いが希望へと変わりつつあります。大館能代空港や大館ドームが現実化するようです。すし、パイパスの工事もちこちで進んでいるようです。そんな状況を見たり聞いたりすると、何か胸の高鳴りのようなものを感ずるじやありませんか。

「魅力ある街とは、老人や子供も安心して暮らせる街でなければなりません。例えば、商店街を大型トラックが走り抜けるような危険を、まず解消する必要があります。パイパスの完成でこの危険が



左が石田リポーター、右が釜谷理事長

少なからず緩和されることを願っています」と釜谷理事長は話します。老若男女を問わず平等に、快適な生活を送れるようにすることが街づくりの基本といえそうです。また、「魅力ある街づくりのために私たちが出来ることは？」と尋ねると、「まず大館に住む人たちの意識改革が必要です。『大館には何も無い』という考え方を捨ててください。大館にはほかの街に誇れる素晴らしい事や物が、実

ごみにも責任を持つて

リポーター 佐藤 千里 (緑ヶ丘)

はたくさんあるんですよ」とのこと。あきらめてばかりでは何も変わりません。そこを認識した上で、まず市民が大館を好きになることから街づくりが始まるんだと思います。街づくりの第一歩は難しいものではないと思います。今一度、大館を見つめ直してみませんか？ そしてもっとこの街を好きになつてはどうでしょう。本当は私も魅力を感じているんです。大館の街に。

市民リポーターとして、私がどれだけ市民の皆さんへお伝えできるか不安もありますが、結婚して十年目という名ばかりのベテラン主婦としてではなく、主婦一年生に戻ったつもりで、紙面をお借りして学んでいきたいと思っています。小学校の社会科でも、工場から出る汚水や煙による公害問題を学んできたものの、対岸の火事のようには思っていました。でも、私たちは今、自らの手で引き起こしたごみ公害の中、「ごみ戦争」に明け暮れている毎日かと思えます。昨年四月からごみの収集方法が変わりましたが、生ごみを家庭でコンポスト処理して肥料にしたり、少しの紙くずは燃やしたり、また、牛乳パックや発砲スチロールト

レー、アルミ缶やスチール缶などはリサイクルへ回すといった協力のお陰で、昨年比で一七%のごみが減っているといえます。しかしその反面、安易な気持ちで燃やせるごみに混入されたスプーンやフォーク、犬の鎖などの金属類のせいで、ごみを砕く破砕機の刃が破損しているそうです。刃は一個八万円。この交換・修理だけで去年は三百二十万円もの経費がかかっているということでした。私たちは、ごみを置き置き場に置いてしまえば他人のごみという考えこそ捨てなければならぬと思います。出し方の不適切なごみはごみ置き場に残されますが、収集にあたる方はその理由を書いたシールを袋に張っていくそ

うです。残されたごみにも目を向け、何が間違っていたのかも考えてみてはどうでしょう。燃やせるごみなら半透明の指定袋、燃やせないごみと資源ごみなら透明な指定袋(スーパの透明袋も可)に入れるのはもちろんですが、ごみ袋を手にしたら、「これは今日出せるごみ?」「ほかのごみは混じっていないかしら?」と気を付けて出すごみに責任を持って袋に記名し、ごみ置き場へ持って行つてはどうでしょうか。今回、ごみ焼却場(環境衛生課)で職員の方々に会いし、将来はごみをただ焼いて灰にするばかりではなく、いろいろな形で活用していこうとリサイクルプロジェクトにも取り組んでいると伺いました。これからは私も、ごみをくずかごに捨てる時から協力していきたいと思っています。



環境衛生課で田村課長に伺いました